

中央研究院歴史語言研究所との協約締結

2016年2月17日、松村恵司所長が台湾・台北市内の中央研究院歴史語言研究所（以下史語所と略称）を訪問し、史語所の黄進興所長とともに「国立文化財機構奈良文化財研究所と中央研究院歴史語言研究所の研究協力に関する協約書」に調印し、研究協約を締結しました。

奈文研と史語所は、どちらも文化財研究の中心的拠点として、出土文字資料の研究や保管・公開において重要な役割を果たしている機関です。

奈文研は日本における木簡の調査・研究の中心拠点であり、先端的な研究の展開や調査手法の開発のみならず、資料集やデータベースによる資料公開もおこなっています。史語所は1928年創設の分厚い研究の伝統を誇り、報告書の刊行や漢籍文献データベース等の多様なデータベースの公開、簡牘の意欲的な展示等、資料公開にも精力的に取り組んでいます。

本協約では、こうした両研究所がもつ様々な研究の蓄積やノウハウを交換することで、木簡・簡牘の研究資源化および研究の促進・深化を目指します。

また、短期的な成果を狙うのではなく、無理をしない、細く長い研究協力の継続を目指している点は、本協約の特徴といえます。これは、両研究所の知的資源の深みと豊かさを考えた結果、導き出された方向性です。

現在、木簡・簡牘資料の画像取得方法についての技術交流を進めており、近々史語所から刊行される『居延漢簡(参)』にはその成果が盛り込まれる予定と聞いています。今後さらに多様な交流が進み、豊かな成果が上がるのが期待されます。

(都城発掘調査部 馬場 基)



笑顔で協約書に調印する両所長

出雲市内神社調査

建造物研究室では2016年度に出雲市からの受託で、すでに調査の終了している出雲大社を除く市内の神社に残る社殿の悉皆的な調査をおこなっています。これまで約190件の神社の現地調査をおこなってきました。今回の悉皆調査で、外観からの調査により古いもので17世紀後期、それ以降近代までの社殿が確認されました。

出雲大社の膝元で、大社造から派生したと考えられる切妻造妻入の本殿が多くみられましたが、大社の本殿等に代表される2間四方、田の字平面の本体前面に偏って階隠(階段の屋根)の付く純粋な大社造は、ほとんどみられませんでした。屋根が斜めにかかる階隠の多くは本体の正面中央に取り付き、正面扉口は中央にあって内部は1室と考えられます。また、大社にはない組物を用いる社殿も意外に多く、18世紀前期とみられる遺構にも導入されています。大社の寛文年間造営の摂社・末社の中には、田の字平面でない中央に扉口をもつものがあり、大社本殿の寛文年間の計画図には組物を用いた本殿が描かれていることから、大社造からの派生変化は17世紀後期以前に色々なパターンが登場していたことがうかがわれます。

大社造以外では流造も相当数あり、前方縁は庇柱まで張ってその前方に階段を置き、現況では庇側面を柱間装置で仕切っているのが、前室付流造に近い形態となります。縁を四方にめぐらせ、前方縁を広く取るのは大社造の派生形式に影響を受けた、他地方にはない特徴と考えられます。

今後は各類型にかかる代表的と考えられる遺構の詳細調査をおこなう予定です。

(文化遺産部 林 良彦)



大宮神社本殿